

平成二十九年二月十日発行  
皇學館論叢第五十卷第一号 抜刷

# 第三回秋田県知事選挙

伊  
藤  
寛  
崇

## 第三回秋田県知事選挙

伊藤 寛 崇

### □ 要 旨

第三回秋田県知事選挙は前回次点となった小畑勇二郎がいち早く日本民主党（以下、民主党）に出馬の意思を伝え、これに自由党と日本社会党右派および左派（以下、両派社会党）が同調する形で四党による保革相乗り候補者となった。一方、現職の池田徳治知事は告示日ぎりぎりまで再出馬を模索したものの、小畑の再チャレンジの動きに巻き込まれて出馬断念を余儀なくされた。このほかに右派社会党を離党中の古沢斐あやると前回選挙戦半ばで出馬辞退した日本共産党（以下、共産党）の鈴木清が立候補したものの序盤戦から小畑優勢が広く伝えられたために有権者の関心は同日選となった県議選の方に向けられた。選挙結果は約七四パーセントの得票率を獲得した小畑が二候補者を大きく引き離して四年前の雪辱を晴らした。

小畑は六期二十四年間、秋田県政を担うことになるが、一期目の任期中は池田県政下で発生した負の遺産の処理に追われることになる。しかしながら二期目以降の目玉政策となる八郎潟干拓事業や秋田国体の誘致などの大型プロジェクトをその辣腕を発揮して手がけ、いわば県民党を標榜して以後の知事選で圧勝する原動力を形成する。

### □ キーワード

知事選 再チャレンジ 保革相乗り 無風選挙 長期政権

## はじめに

第三回秋田県知事選挙は昭和三十(一九五五)年四月二十三日に実施されることになったが、戦後間もなく復活した政党の地方組織は一層強固なものとなり、選挙戦の実働部隊である県議会議員・市町村議会議員の果たす役割もさらに重要度を増していた。また、第二回秋田県知事選挙(昭和二十六年四月三十日)と同じく、候補者の選定過程から県選出の国会議員が大きく関与することとなり、<sup>①</sup>県民の支持が得られる候補者をいかに早い時期に擁立できるかその動向にも大きな注目が集まった。

中央では昭和二十九年末に通算七年二カ月間にわたって政権を担当した吉田茂内閣にかわって鳩山一郎内閣が成立したが、鳩山を支持する民主党の議席は過半数に満たなかったため両派社会党の支持を得て首班指名を受けた。その見返りとして早期に解散することが二党間で合意しており、政権発足からわずか一カ月半後の一月二十四日に衆議院を解散した(天の声解散)。このため、県選出の国会議員は衆院選に全力を傾注することとなり、知事選候補者の選定は総選挙(二月二十七日)後に持ち越しとなった。前年の後半以降、候補者としてその去就に内外の注目が集まったのは現職の池田徳治知事と前回次点となった小畑勇二郎秋田市助役の二人である。

本稿では公選三回目の秋田県知事選挙の動向について新聞四紙『秋田魁新報』、『読売新聞秋田地方版』、『毎日新聞秋田地方版』、『朝日新聞秋田地方版』の報道記事から考察したいと思う。

## 1、候補者の選定

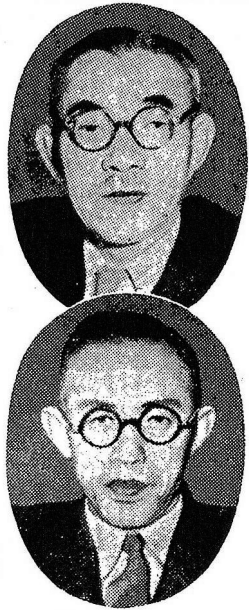
そもそも「知事選の話題は昨年春頃から出はじめ年末までには立候補の顔触れがほぼ決定するだろうと予想」されていたが、衆議院の解散によって早期の候補者選定は困難となった。『秋田魁新報』は元日の特集記事の中で、まず現職である池田知事の再出馬説をトップに挙げているが、県選出の国会議員である石田博英と根本龍太郎が絡んで保守の足並みが乱れつつあり、場合によっては池田再出馬が流動的になる恐れがあることを伝えている。池田は保守（民主党と自由党）が統一候補者として自分を推薦してくれば再出馬するというスタンスだった。さらに、前回は候補者として名前が浮上した平沢長吉自由党県支部長、笹山茂太郎旧改進黨県連会長の二人を挙げている。保守の本心としては池田知事ではなく国会議員として実績がある平沢か笹山を推したいところであったが、総選挙の実施によってこの二人のうち一人を候補者に担ぐという選択肢は事実上消滅した。そうした中で石田は候補者の意向について次のように述べている。<sup>(3)</sup>

一、池田氏でなく適当な候補者があればその人を知事に推す。

一、前知事選挙の池田、小畑一騎打ちという様な将来シコリの残る選挙は避けたい。

要するに池田以外の候補者、すなわち本命である小畑を擁立するというのが保守の大多数を占める民主党の方針であった。この他に、柳谷清三郎能代市長、蓮池公咲前知事の再登板説を挙げているが、柳谷については石田と笹山が非公式に出馬を打診したものの本人が拒否した模様であることを伝えている。

一月十六日、民主党秋田県支部連合会が発足し、会長に石田、幹事長に須磨弥吉郎を選出した。そして同夜、石田



上が池田、下が小畑  
〔秋田魁新報〕  
昭和30年1月1日5面)

と小畑は秋田市の栄太楼旅館で約二時間にわたって会談し、小畑の立候補の意志について確認した<sup>(4)</sup>。再出馬を模索していた池田にとってこの会談はまさに寝耳に水であり、小畑に大きく牽制される形となった。この会談の意義について『秋田魁新報』は次のように指摘している。

① 民主党支部結成にあたり旧改進黨の人心の一新を強く要望したが、就任早々の石田会長がこれに応ずるが如き動きを示したこと。

② 前回の知事選で池田知事を実現した石田氏が今回は一転して小畑氏の動向を注目し再度にわたり会談した。しかも一方には蓮池導入説もあり、いずれにしても池田現知事の再出馬に対し保守系の否定的態度がみられること。

③ 両派社会党はまだ公表こそしていないが、すでに小畑氏推薦の態度を固め、これについて両社県連の首脳が早速社党大会に出席を利用して東京会談をひらき小畑の線を確認する直前であるが、民主党の働きかけに小畑氏はどういう意向を今後明らかにして行くか、これと両社連の動向など注目に値すること。

民主党は自由党を離党した鳩山派と国民民主党の後身である改進黨が合併して誕生した保守政党であったが、旧改進黨出身である笹山系も池田知事に対しては批判的立場を取っていたため、会長に就任早々の石田は小畑支持を党の方針に掲げることで県連の結束力をより強固なものにしようとしたことは言うまでもない。そして民主党の動向は両派社会党にも大きな影響を与え、前回小畑擁立の中心的役割を果たした社会党としては両派に分裂しているものこ

こは一致団結して再び小畑を支持する意向を示していた。こうして公選三回目の知事選は民主党主導で事実上スタートしたことになる。

それからわずか四日後の二十日、池田を出馬辞退に追い込みたい石田は知事選構想について、まず池田と小畑の対立回避に全力を傾注し、その上で池田の後任として元衆議院議員の二田（これの）是儀天王町長の擁立を検討することを発表した。<sup>(5)</sup> 突如として名前が浮上した二田であるが、池田に動揺を与えて不出馬に至らしめようと石田が考案したシナリオであることは一目瞭然だった。池田はこの四年間可もなく不可もなく知事職を粛々と務めてきたが、周囲からは「前回はお膳立てが出来たところすわっただけでよかつたが、今回は情勢が一変していることから無理押ししてまでも出ることあるまい」という意見が出始めていた。<sup>(6)</sup> しかし、当の池田はこうした周囲の慎重論を聞き入れずにこの時点で八割方出馬する意向を固め、直ちに上京して県選出の国会議員にその意向を伝達した。<sup>(7)</sup> 池田はこれ以上曖昧な態度を取ればますます不利になることを意識してこの行動に打って出たものであるが、池田主導による形勢逆転には至らなかった。帰県後直ちに「保守一本で推されれば知事選に再出馬する用意がある」と表明し、<sup>(8)</sup> 民主党と小畑の關係に楔を打ち込もうとするのが精一杯だった。間もなく衆議院が解散（二十四日）され、知事選をめぐる動きは総選挙（二月二十七日）が終わるまで休止状態となった。総選挙の結果は民主党が全県で五議席を獲得して引き続き和田県政界の主導権を握ることになったが、これとは対照的に全県で三人を擁立した自由党は国政での議席を失った。<sup>(9)</sup>

三月に入ると知事選に向けての動きが再び激しくなり、池田と小畑の直接決戦を回避させたい石田と根本は林野庁長官（元秋田営林局長）の柴田栄を擁立しようとする苦肉の策に打って出た。しかし、当の柴田は翌年に控えた参院選への出馬を切望したためその擁立までには至らなかった。<sup>(10)</sup> このため民主党県連幹部の間では円満解決策として一月に石田が提示した二田を知事に擁立し、その代わりに池田を参議院議員に転向させ、小畑を副知事に起用するというそれ

それにポストを用意することで決着を図ろうとする意見が出始めた。<sup>(11)</sup>

候補者をめぐる情勢が混沌としている中で、四日に小畑は秋田市役所で市政記者団会見に臨み、期日はまだ決定していないものの近く助役を辞職して知事選に立候補することを正式に表明した。<sup>(12)</sup> 小畑があえてこの日に出馬表明を行ったのは総選挙の結果を踏まえて、民主党が池田支持でまとまる可能性は極めて低く自分を支持してくれるのが有力であるという確信があったからである。さらに同夜、小畑は上京して蓮池前知事（東北興業総裁）との会談に臨んだ。実はこのとき蓮池には民主党側から小畑の意向を確認することと場合によっては第三候補の擁立を前提に辞退勧告する任務が与えられていたが、余りにも出馬の意思が固いため民主党としては第三者を介しての打開工作は事実上不可能となった。小畑の意向は蓮池から直ちに須磨を介して石田に伝達された。<sup>(13)</sup> 一方、この日は県町村会正副委員会が自治会館で開かれ、池田と小畑の対立回避を願う書簡の作成を決定し、翌五日に民主党・自由党・両派社会党各支部長宛に発送した。本来こうした重要案件は会長および評議員に諮った上で実行すべきところであったが、候補者の決定が目前に迫っていたことから緊急を要する問題として異例のスピード対応を行った。<sup>(14)</sup>

七日午後一時半から県選出の民主党代議士団が根本が控える首相官邸官房長官室に集まって知事選問題を協議し、「池田、小畑両氏の決戦は避けられずとみて第三者導入工作を一応打切ること」と「両氏のうちいずれを推すかについては中央では決定せず県連総務会で決める」ことを決定した。これにより池田と小畑による再度の決戦はもはや避けられない状態となった。議員の大勢は小畑支持だったが、前回革新新派が推薦した小畑を今回は保守が推薦するのは筋が通らないとして強硬に反対した斎藤憲三に配慮して結論は後日に持ち越した。<sup>(15)</sup> 石田は斎藤をはじめとする反小畑派を意識して、「小畑を推すことになればもち論思想統一ははかる」意思を強調した。

翌八日午後四時半から民主党県連総務会が県連事務所にて約六〇人が出席して開かれたが、冒頭で池田から入党の申

し込みがあったことが報告されたため一時ざわめいたもののやがて落ち着きを取り戻し各地の情勢報告に移った。<sup>(16)</sup> 池田に対しては先に民主党側から入党を要請したもののこの時は自由党に配慮して態度を保留したが、知事選の時期が切迫していることと民主党内の情勢が池田にとって決して有利でないと判断して申し込みに至ったのである。ところがこの日の総務会では池田の入党問題については一切話し合われなかった。一方、各地の情勢については秋田市以北が小畑、県南と由利が池田、仙北・平鹿・雄勝は池田と小畑が拮抗しており、どうかして両者が対決せずに済む方法は無いものか午後八時過ぎまで協議が続けられたが、結論は十五日に持ち越しとなった。<sup>(17)</sup> さて、池田のこの行動に對して猛反発したのは自由党である。十日午後五時半から自由党県支部において県会議員会（一人出席）<sup>(18)</sup> を開いて知事選問題を協議し、池田と絶縁することが全会一致で了承され、十四日には早々と小畑支持を決定した。<sup>(19)</sup> またこれに先立つ十一日には左派社会党中央執行委員会で小畑が推薦候補者に決定したが、このことは小畑が左派社会党の公認候補者となったとの印象を内外に与える結果となり、十四日に川口大助左派社会党書記長は民主党と右派社会党に配慮して「県連はまだ態度を決定していないし、公認ということはありえない」と弁明してその火消しに追われた。<sup>(20)</sup>

十五日午前十一時から民主党総務会が栄太楼旅館に六五人が出席して開かれ、各郡市支部から知事選候補者として小畑、池田、二田擁立案が出されたが、二田は立候補の意思がなく早々に辞退したため、小畑と池田のどちらを推薦するのかその一点に絞られた。そして最終結論に至る前提として小畑の政治的立場をはっきりさせた上で支持を決定したいという意見が大勢を占めた。<sup>(21)</sup> 池田支持派は小畑が民主党に入党することが第一条件であると、一方の小畑支持派は政策の一致が最重要課題であるとして「民主党の主体性をつらぬく方法を小畑氏にはっきりさせる」ことを主張した。両派の確認事項を集約した上で、石田と須磨はただちに小畑と会談して次の三点を基本合意した。

① 民主党の推薦を受けた以上小畑氏は民主党の決定にそう。



②今後両派社会党のいずれにも入党しない。

③小畑氏の思想は石田、須磨氏と一致している。

池田支持派としては小畑が両派社会党との関係上、民主党の決定にあっさり従うことは到底不可能であろうと予想して、入党拒否を口実に池田推薦に方針転換させるつもりでいたが、予想外の合意成立によってこの工作は失敗に終わった。小畑との会談の最中に須磨は途中退席して急ぎ池田の下を訪れ、この日二度にわたって形勢不利を理由に出馬辞退を勧告したが、池田は「民主党の決定があつてから自分の態度を決める。小畑君以外に保守系から候補者を立てられぬか、小畑君が民主党から推された場合、自分が立候補を断念するかについてはまだ踏み切れない」と答えるに止まり即答を避けた。その後、再開した総務会では小畑との合意事項が報告されたが、両派の対立はなお続いたことから現役と元代議士にどちらを推薦するかを一任して、その決定に総務会が従うことになった。すぐさま石田、須磨、笹山、斎藤の現役代議士と塩田団平（元貴族院議員）、二田、松野孝一（元衆議院議員）の元代議士の七人が別室で協議した結果、多数決によらず円満に小畑の推薦が決定し、午後九時半に総務会はこの決定を満場一致で了承した。

さらに、この日は県教育会館で県労会議の選挙対策委員会が開かれ、前回と同じく小畑支持を決定した。これを受けて両派社会党と県労会議の共闘会議が開かれ、「かねて左右両派社会党、県労会議では県知事候補について慎重に協議してきたが、本日県政刷新のため小畑勇二郎氏を最適任と認め推薦することに決定した」という共同声明を発表した。<sup>22</sup> こうして小畑は保守の民主党と自由党、共産党を除く革新の両派社会党が支持する保革相乗り候補者となった。『秋田魁新報』は知事選の形勢が前回とは全く逆転したことを次のように指摘している。<sup>23</sup>

何がこれほどまでに池田氏を追いつめたのか―それは一口で言えば民主党が池田氏に嫌気がさしたのである。

池田氏を知事に再選できぬという致命的な失敗が同氏にあったわけではない。しかしもう一期池田氏に知事をやらせることはどうも……という一種のタメライが民主党の支配的な空気であったことは確かであり敵もなにかわりこれと違って力強い味方も任期中つくり得なかったという池田氏をよく言えば淡々振り、悪く言えば気はくのなさざがジリジリ池田氏を追い詰めた結果になったようである。

結局のところ、池田は四年間大きな失策もなく肅々と知事職を務めて来たわけであるが、小畑の再チャレンジの動きに巻き込まれる形で出馬のタイミングを失ってしまったと言える。翌十六日、小畑は武埜祐吉秋田市長に助役の辞表を提出し、記者会見で知事選出馬の所信を表明した。<sup>(24)</sup>

赤字の計画的解消と機構の簡素化はまず徹底した経費の節約と担税力を養うことにあると思う。人事については現在白紙でヒモつきなどない。機構の簡素化に当っては、沈滞している行政力を清新はつらつとしたものに切りかえることがネライであり、これによって県庁機構に強力な指導力をもたせたい。民主党との関係について批判の声もあるとのことだが、決定に添うということは、自治体の予算が与党政府の施策や予算の強い反映をうけるので、県政の運営に当っては与党政府の政策に逆行しないということである。これに関しては石田会長も「この点はいくまでも政策上のことで、自治体の行政権を侵したりすることではない」とはっきり了解しあっている。また私と石田、須磨両氏の間で政治思想の一致ということは、赤字財政の建直しと機構改革を基本的な考え方として県政の刷新を中心的問題として考え、かつ行なってゆくことに意見の一致をみたということである。だから私は両派社会党に入党しないが民主党にも入党しない。

小畑は一党一派に偏することなくいわば県民党の姿勢で大多数の支持をバックに選挙戦に臨もうとしていた。その後間もなく、民主党、自由党、両派社会党、県労会議、農協政治連盟、日政連の七派が選挙戦での連携を強化するた

め連絡会を設置し、<sup>(25)</sup> 主要メンバーには二田是儀、長谷山行毅、川口大助、宮腰庄太郎、鈴木次郎、鈴木武司、鈴木寿、手賀義雄らが就任した。民主党が小畑を推薦したことから池田の去就に内外の注目が集まったが、十七日午後二時半からの記者会見で、まずこの日の朝に須磨から民主党への入党が承認されたことと顧問に任用するとの電話連絡があったことを述べ、党人となった以上は党議に従うことを明らかにし、今後の身の振り方については「党議に従って立候補断念するか、脱党して立候補するか、任期一杯知事つとめるか」考慮中であるとして明言を避けた。<sup>(26)</sup>ところが、池田は同夜に上京して、翌十八日午前中に在京で最大の支持者である横山助成元貴族院議員を訪問して保守両党が小畑推薦に至った経過を説明した。新聞報道によれば池田は自身の再出馬については一切触れなかったことを述べている<sup>(27)</sup>が、突然の上京からして自身の去就について横山から何らかのアドバイスを受けたことは明白である。こうして池田は二十九日の告示日に向けて何とかして立候補したいという意思を持ち続けていたが、二十六日の午後に至り立候補断念の意思を固め、<sup>(28)</sup> 極秘裏に再び上京して翌二十七日に横山ほか各先輩および支持者を訪ねてその趣を伝えた。<sup>(29)</sup> 帰県後の二十九日午後三時十五分から知事公舎で記者会見を行い、支持者からは出馬すべしとの強硬論も出たため最後までその対応に苦慮したが、「現状で立候補を固執することはいたずらに県民の間に感情的対立を激化させ、不幸な結果を招く」との結論に達し、次の声明文を発表して不出馬を表明した。<sup>(30)</sup>

来る四月二十三日に行われる知事選挙に際し、再出馬すべきか否かについて、過般来考慮を重ねて来たのでありますが、各般の情勢を検討の結果、立候補すべきでないとの結論に到達しましたので、茲に私の所信を率直に表明し、多年私を支持し、且つ現在もなお私の再選を希望して止まない県民同志に対し、深甚なる感謝を含めて、その諒解を求めるものであります。

顧みれば四年前の知事選挙におきまして県内保守両党は当時土木部長であった私の出馬をすすめたのであります

が、このような事態を夢想だにしていなかった私は、在京の先輩、或いは友人知己の意見を徴し、遂に事態收拾のため、敢て非才を顧みず、保守提携による県政の運営を条件として、その求めに応じたのであります。選挙の結果、幸い県民大多数の信任を得て当選した私は、爾来県政最高の責任ある地位に鑑み、如何なる施策を以つて県勢伸張の実を挙げるかに、日夜肝を砕いて参つたのであります。当時の本県の実情から致しまして、先ず災害を防除し、資源を開発し、生産基盤を造成することが必要と認められ、御承知の如く近く竣工する鑛畑堰堤これに伴う県営発電所の建設をはじめ、国道重要橋梁の永久橋架替等、治山治水、資源開発、生産基盤造成に關する一連の施策を計画、実施して来たのであります。一面、本県の基幹産業たる農林業の振興には、特に意を用いたところでありまして、農家經濟の安定による農家購買力の増大と、その結果としての中小商工業の振興を考へて参つたのであります。

又、任期半ば頃から深刻化した県財政の逼迫に當面しまして、知事会等を通じて政府の善処方を要望する一方、県自体としても再建計画を樹立し、実施の段階に來ていたのであります。しかもこの乏しい財政の中から、県民福祉のため、県立中央病院の建設、或いは失業対策等、民生安定の諸施策も講じて参つたのであります。

以上の施策は、勿論保守両党の提携支持によつて実施して来たのであります。任期四年、今や県政の基盤も確立し、その方向も定まりましたので、所期の目的を達することが、県民に対する私の責任であり、且つ義務であると考えましたので、今回の知事改選期に当り再び立候補の用意ある旨を表明し、前回同様保守両党の提携による支持を期待し、これを懇請したのであります。然るに、結果として御承知の如く、民主、自由両党の支持を得ることが出来なかつたのであります。保守、革新二勢力の対立を肯定し現在においては、中央政局に繋る保守勢力を以て、県政の運営に當るべきであるというのが、私年来の主張であります。今回民主、自由両党支部の知

事候補推薦に当って執られた措置は、保守両党の良識ある判断に期待していた私として、洵に心外であり、且つ遺憾に堪えなかつた次第であります。然も保守両党の支持を失つた私に對しまして、私の立場を理解し同情される県民の多数から、連日蹶起を激励され、その厚情に感泣してあるのでありますが、事態斯くなりました以上、私が立候補を固執することは、徒らに県民の間に感情的な対立を激化させ、不幸な結果を招来すると考えましたので、本意ならずも茲に立候補断念の決意を固めるに至つたのであります。

もとより地位に恋々たるものない私は、事を茲に決して、いたつて淡々たるものであります。冀くは県民同志の各位におかれましても、御期待に添い得なかつた私の苦衷を御諒察の上、ご寛容下さるよう、切にお願い申上げる次第であります。

『秋田魁新報』は民主党が小畑を推薦した結果、池田が再出馬辞退に追い込まれたことについて「党人に候補者を持たない政党が一人の有力候補を奪い合つた形はあまり感じ出来ないものであつた」と指摘しており、民主党の候補者選定の在り方に苦言を呈している。<sup>(31)</sup>

さて、小畑以外の立候補者の動きを見ていくと、まず共産党は十六日に小畑が保守と革新四党から推薦を受けて立候補表明したことを厳しく批判し、三浦雷太郎、鈴木義雄、鈴木清のいずれか一名を独自候補者として擁立することになった。<sup>(32)</sup> また両派社会党内にも保守二党と提携することに不満を持つ者も少なくなく、<sup>(33)</sup> 二十七日に右派社会党反主流派の支持を背景に秋田市の弁護士古沢斐が出馬を表明した。<sup>(34)</sup> 古沢は出馬にあつて右派社会党の推薦を得るために親交がある北島末吉執行委員を通じて復党を口頭で申し入れたが、秋田市支部に対して正式に文書で行われたものはなかつたことから執行委員会として一切取り上げないことを決定した。<sup>(35)</sup> これにより古沢は無所属での出馬を余儀なくされたが、立候補に当たり次の所信を表明した。<sup>(36)</sup>

一、現在の県政界は真暗やみである。私の立候補によって県政の改革ができるものと信じておりこれが私の信念でもある。

一、私の県政に対する抱負はまず教員組合の要望を全面的に容認する。この理由は敗戦しても破産しても知識と技術は奪われず必ず復興の原動力となるからである。また地方自治法に認めている範囲内で県行政機構の革新と徹底的な行政整理をする。これは知事、県会議員の歳費を削減し各種委員の報酬、旅費などを実費程度として赤字を克服しようというものである。

共産党は知事選告示前日の二十八日に、「小畑氏は民主、自由両党保守合同の橋渡しを行いながら一方において社会党と労働者にも色目を使い、民主戦線の統一を分断しよう」と策し官僚的任務を果たしている。この保守反動勢力に対抗、県議、知事選を通じて民主戦線の統一を期するため鈴木氏を知事選にたてる決意をかためた」という声明書を発表して、三度（前回は選挙戦半ばで辞退）鈴木清を公認候補者に決定した。<sup>(37)</sup>

このように、第三回秋田県知事選挙は秋田市助役を辞職した前回の敗者である小畑に保守二党と共産党を除く革新政党が相乗りし、この動きに反発した右派社会党を離党中の古沢と三度目の立候補となる共産党の鈴木が挑む構図となった。三人の経歴は次の通りである。<sup>(38)</sup>

小畑勇二郎（無所属、新）

北秋田郡早口町出身、四十八歳、秋田中卒。北秋田郡下の小学校教員をふり出しに昭和九年北秋田財務局勤務を経て、十四年県庁に入り庶務課員として予算編成事務に携り文書課長、調査課長、庶務課長を歴任、蓮池知事の認めるところとなって総務部次長、民生部長となったが民生部長としては能代、鷹巣大火の処理、児童会館の建設などに腕を振り二十五年三月総務部長となり、翌年の知事選に池田知事と一騎打ちして三万票の差で落選し

た。しかし六月秋田市第一助役に懇請されて就任。武埴市長を助けて敏腕振りを示した。この三月知事立候補のため退職。

古沢斐（無所属、新）

秋田市出身、五十三歳、東京帝大卒。昭和五年社会民衆党秋田県支部連合会を組織して会長となり、同年日本労働総同盟秋田支部連合会、日本農民組合総同盟秋田県支部連合会を組織して会長となる。同七年鈴木文治氏の秘書として西欧各国労働組合を歴訪。十二年社会大衆党公認候補として第一区から立候補落選、同年社会大衆党県連を組織してその初代会長となった。戦後昭和二十一年には日本社会党秋田県支部連合会を結成し副連合会長となったが同年追放となって政界を退き弁護士業として今日に至る。

鈴木清（共産党、新）

平鹿郡旭村出身、現住所横手市旭地区赤坂、四十七歳、山形高校中退。日本プロレタリア作家同盟中央委員、旭村村長、平鹿郡町村会長、県食糧調整委員、日農中央委員を歴任、本年三月の総選挙では同党から立候補したが得票七千票で破れた。なお二十二年四月の知事選では僅少の差で破れ二十六年四月の知事選では途中で辞退した。

## 2、知事選挙の告示

三月二十九日、第三回秋田県知事選挙が告示され二十五日間の選挙戦に突入した。古沢と小畑は二十九日の午前中に、鈴木は三十日午後それぞれ立候補の届出を行ったが、四月八日午後五時の締切までに他の立候補がなかったことから三つ巴の選挙戦が確定した。立候補に当たり、三人はそれぞれ政見を発表した。<sup>(40)</sup>

古沢斐——温泉会議を厳禁

一、元来、私は一介の野人です。今更、知事などは不向きかと思われるが、その私が何故立候補したのか？

一、今日若し保守と革新の両者が共同目的、即ち一致した政策に向い、四党協力の大きな政治力で知事として働かせるのなら誠に結構至極で県民の誰にも文句や不平はありません。

一、処が実際はそうでない。保守革新双方とも、腹中では夫々自分だけが知事を使う考えなのです。

一、それなのに、県政の主人である県民を欺し、各党一致の美名の下に闇取引したのですから、私は、承知出来ないのです。

一、県民そつちのけにした民主々義などはありません。そんな県民のための政治が、どこにありますでしょうか。

一、しかし、唯一つ知事が誰であろうと、実行の出来る途があります。それは県政の本当の主人である県民がその政治力を結集し、誰から見ても、やらねばならぬ仕事を世論の力で政党にやらせる事です。

一、この選挙の勝負は私と小畑君ではありません。

「皆さんが勝つか、徒党が勝つか」

「県民か、政党か」

の問題です。

政策と実行の方法

一、行政整理と県費節約

(1) 過去、流職の疑ある者（汚職メモに基き）、一斉待命を命じ、俸給を与えて、自力で求職させる。

(2) 知事、県議、人事委員、労働委員等各種委員に俸給手当の返上運動を起し、実費弁償の程度に改める。



(3) 温泉会議や大名視察旅行は厳禁する。

(4) 役人及び自動車等の経費を縮減する。

二、行政監査を厳格にし、国費、県費を乱費する水増し工事や不正工事を厳禁する。

(1) 不正を働いた土建屋は、以後、指名入札に参加させない。

(2) 不正をやった処へは補助をやらない。

三、義務教育を振興する。

四、知事公舎は、他に転用する。

五、県公報は「民の声」欄を設け県民の声を公表する。

小畑勇二郎 — 赤字の計画解消 —

今回私は民主、自由、両派社会党の四党と県労会議、農協政治連盟、日本教職員政治連盟のご推薦により、県知事選挙に立候補いたしました。国政においては、保守、革新の政党対立は当然であり、そこに進歩があるのでありますが、住民の直接選挙による地方自治体の首長は、中央で決定された施策をいかに有利に地方の実情に合わせて、県民の福祉を図るかが最大の使命と存じます。従って一党一派に偏することなく飽くまでも中正な立場から県内の問題につきましましては四党並びに推薦団体の主張をよく調和して協力一致の体制をとり、外に向つては四党の政治力を十分に結集していただいてこの難局の打開を図りたいと存じます。

当選後の重点政策としては、

一、赤字の計画的解消。

二、総合開発による県民所得の増加。

三、農業団体の強化による農政の確立。

四、中小企業の育成と二、三男の職場開拓。  
等であります。

池田前知事は、立派なお人柄から県人の民選知事として親まれ鎧畑の發電、中央病院等大きな事業に手をつけられました。が、その仕事を継承することは勿論人事等についても、無用の混乱を起さぬよう十分留意して参りたいと思います。

ただ特に念願するところは、県政を支える二本の支柱である「県財政」と「行政機構」についてはこの際思い切った措置を断行し、健全な財政と清新な指導力を確立する事でありまして廿有八年間終始地方自治体に奉公して参りました経験を生かし全身全能の努力を、この二点に傾注する覚悟であります。

鈴木清 — 安定生活を樹立 —

総選挙で民主勢力は、国会に三分の一以上の議席をしめた結果、憲法を改憲し、国民を戦争にひき入れようとした民主党、自由党の意図はくつがえされました。あせったアメリカは、ますますこつな内政干渉を行い、保守合同を早やめ、一方社会党を墮落させることによって、国民の団結を弱め、彼等の再軍備、政争政策を実現しようとしています。

これは前の世界戦争に国民が投げ入れられたときと同じ道です。彼等はこのような謀略を「県政は国の政治と違うから超党派で行こう」という美名の下に行なっているのです。更に彼等は県民に「小畑氏をかついだ社会党はだらしがない」という不満をかもし出すことによって、県会議員を一人じめして県政をますます食いものにしようとしています。

### 第3回秋田県知事選挙の選挙運動費用

#### ●精算届の部

知事候補者の氏名	精算届出をなしたる支出責任者の氏名	寄附及びその他の収入の総額	支出金額	
			立候補のための支出	選挙運動のための支出
小畑勇二郎	荻原麟次郎	737,500円	-	562,991円
鈴木清	山田成孝	117,800円	-	117,775円
古沢斐	三浦雷太郎	205,371円	-	205,371円

※秋選管告示第41号（『秋田県公報』号外(一)、昭和30年6月6日）による。

わが党はこのような反動勢力の策謀を許しません。総選挙で団結した県民の力をさらに強め、社会党と協力し、県議会に半数以上の議席を勝ち取って、県民の要求を実現し、国の政治を独立と平和、生活安定の政策に切りか

えるため闘うものです。

一、労働者に食える賃金を、農民にひき合う米価と、営農資金の保障。水利、土地改良、未墾地の開拓を国庫でやらせる。

一、重い税金に反対。中小企業家、商人への長期、低利の融資。

一、学校校舎、病院、託児所、水道、農道、橋、図書館、公民館等の施設を完備させる。

一、原子戦争準備に反対して平和を守り、ソ同盟、中国と国交を回復し、平和と繁栄のため、国の政治をかえるよう、県民は団結しましょう。

立候補者の政見は新聞紙面を通じて活字でのみ伝えられたものではなく、日本放送協会（NHK）と昭和二十年代後半以降に設立された民放のラジオ局でも政見が放送された。秋田県では昭和二十八年十一月一日に全国二十九番目の民放ラジオ局としてRTBラジオ東北（現ABS秋田放送）が開局し、知事選候補者による政見放送（一人五分以内・二回）が行われた<sup>(1)</sup>。このようにして選挙戦に新聞以外の報道手段としてラジオ放送が果たす役割も大きくなっていった。

### 3、選挙戦の動向

三候補者による立会演説会は雄勝郡羽後町の西馬音内小学校体操場を皮切りに県内三三カ所で行われた。<sup>(42)</sup> 初日の六日は午後一時から三〇〇人の聴衆を前に、まず古沢は小畑を支持した両派社会党を厳しく糾弾するとともに、「役人を減らせ、知事の月給が多すぎるからこれを義務教育拡充費に充当しろ、土地改良をやり直せ」などと現県政を批判し、官僚政治がこのまま続く限り政党政治は崩壊することを強調した。続いて小畑は池田県政下で生まれた赤字十二億円を解消する方策として経費節減と県庁の機構改革、農業対策の確立等が必要であるとし、「政党の争いを地方自治体にまで持込むのはよくない。保守、革新の要望を入れてこそ正しい県政があるのだ」と古沢を牽制するとともに、ヒモ付人事は決して行わないことを明言した。「黒い背広に白の造花を胸につけ、さっそうたる男前で登壇」した鈴木は冒頭で小畑をめぐる決定のいきさつを「保守、両社のヤミ取引だ」と糾弾し、池田県政が掲げた鎧畑ダム、八郎潟干拓、奥地開発の三大政策は県民を騙したものだとして真っ向から批判した。

選挙戦は三候補者による激しい言論戦が展開されたが、告示前に全県下の遊説を終了した小畑が序盤から古沢と鈴木を大きくリードしていたためいまち盛り上がり欠けた。さらに、告示日直前に右派社会党本部から統制を受けた北島末吉が古沢の選挙運動に関与出来なくなったこと、言い換えれば両派社会党の小畑支持が揺るがなかったことも大きく影響していた。そのため立会演説会の内容も政策論から次第に知事のスタンス、すなわち県政と政党の関わり方に移って行った。

中盤戦に入っても四党の支持をバックに小畑の優勢は一変せず、同派としては「有効六十万票としても五十万票少

なくとも八割以上はとれる」と自信満々だったが、当の小畑はこの形勢を決して楽観せずむしろ「強い者に与えられがちな一般的反感」と「政党の知事候補経緯に対する不満の声」を警戒して、全県の各町村をもう一度回る計画を立てた。<sup>(45)</sup>これに対して古沢は秋田市、男鹿周辺と北秋田郡・由利郡・雄勝郡地域の弁護士と旧東方会当時の知人関係を頼る限定的な選挙運動に止まっておき、いかにして末端まで知名度を浸透させるかが大きな課題であった。鈴木は共產党の支持基盤を中心に、作家としての個人的な人気を活かしながら古沢と同じく末端への浸透作戦を展開していた。運動の重点は県北の鉾山地帯と秋田市を中心とする県内工業地帯であった。こうした情勢の中で県民の関心は知事選よりも県議選の方に向けられ、四党相乗りの影響が大きく出始めていた。<sup>(46)</sup>『朝日新聞秋田地方版』はこの低調な



一、守れ正義勝て与論!!  
一、県民勝つか、徒党勝つか!!  
秋田県知事候補  
ふるさわ  
古沢 変

一、行政整理 無駄使排除  
一、教育振興 教育費軽減

大正十五年東京帝大法学部卒業  
昭和七年鈴木文治氏と共に西歐  
各国の労働組合を歴訪調査

政見放送 NHK 土曜早六時四十五分  
T R 一千九百零六年四月十五分

(『秋田魁新報』昭和30年4月12日2面)



知事候補者  
小畑 勇一 郎  
お ば た

私は民主、自由、面派社会党と労働、農政連、日政連に推されて、知事に立候補出来た事に心からの責任を感じて居ります。

『赤字をなくして健全財政』  
『与論にきいて明るい県政』  
の二つの目標に  
渾身の努力を捧げます

政見放送 ラジオ東北 二十二日午後六時

(『秋田魁新報』昭和30年4月15日4面)



秋田県知事候補者  
鈴木 清  
スズ キ キヨシ

日本共産党公認

秋田県選挙区議員  
選挙区長、山形県選挙区長  
平鹿町長、同業会長  
昭和二十一年知事選挙、民主戦線候補として立候補  
現在、日本共産党秋田支部長

一略 歴一

○再軍備に協力する県政をやめ  
県民の生活と産業を守りましょう  
○民主自由党を倒し、  
平和独立繁栄のために、  
すべての県民は団結しましょう

政見放送 ラジオ東北 四月二十日午後七時五分

(『秋田魁新報』昭和30年4月18日3面)

政治意識について、「小畑が保守革新四党から推され、池田知事が立候補をあきらめたので、知事選は事実上終わったという感じが強い」とし、「各党公認の県議候補は自分の演説と一緒に、小畑知事候補を頼む」と一言いう約束なのだそうだが、それもほとんどやっていない<sup>(47)</sup>ことを挙げており、知事選と県議選が連動していないことも大きな原因の一つであることを指摘している。

終盤戦に入ると、県議選の候補者同士の激しい攻防の前に知事選の関心はさらに低くなり、はじめは小畑に対する反感が一部にあったものの謙虚な性格に対する好感から各郡市ともに群を抜いた強さを発揮し、圧倒的優勢を維持したまま最終局面を迎えようとしていた。結果は小畑が七から八割の大量得票するのに対し、古沢と鈴木は両者合わせて二から三割の得票に止まると予想された。<sup>(48)</sup>

#### 4、投票結果

第三回秋田県知事選挙の投票は四月二十三日午前七時から県下九六九カ所（うち三カ所が二十二日に繰上）で一斉に実施された。当日の有権者数は七二万三五〇三人（男性三四万七二六八人、女性三七万六三三五人）で六一万二二二八人（男性三〇万二三〇六人、女性三〇万九九二二人）が投票した。投票率は八四・六二パーセント（男性八七・〇八パーセント、女性八二・三五パーセント）で前回を一・九三ポイント下回った。八市九郡の投票結果は【表1】の通りである。

開票は翌二十四日午前八時から県下一八九の開票所で一斉に開始されたが、初めから小畑が二候補者を圧倒的に引き離し、一〇時頃には早くも当選を確実にした。<sup>(49)</sup>小畑は横手第二開票所（鈴木一〇九七票、小畑七一六票、古沢四四票）を除く全ての開票所で最高得票者となり、最終的に古沢に三十四万票余の大差をつけて初当選を果たした。<sup>(50)</sup>

【表1】第3回秋田県知事選挙投票結果

市	郡	当日有権者数	投票者数	投票率
秋田	市	102,566人	85,865人	83.72%
能代	市	34,182人	30,401人	88.94%
横手	市	22,964人	20,154人	87.76%
大館	市	29,492人	24,607人	83.44%
本荘	市	20,815人	18,496人	88.86%
男鹿	市	23,098人	19,847人	85.93%
湯沢	市	26,575人	18,229人	68.59%
大曲	市	22,814人	18,607人	81.56%
鹿角	郡	41,178人	33,073人	80.32%
北秋田	郡	65,469人	54,846人	83.77%
山本	郡	42,386人	35,666人	84.15%
南秋田	郡	41,365人	34,380人	83.11%
河辺	郡	14,349人	12,982人	90.47%
由利	郡	56,513人	50,489人	89.34%
仙北	郡	88,250人	75,011人	85.00%
平鹿	郡	52,263人	44,928人	85.97%
雄勝	郡	39,224人	34,647人	88.33%
県計		723,503人	612,228人	84.62%

※秋田県選挙管理委員会編『選挙の記録－昭和21年至昭和33年選挙結果総覧』。

【表2】第3回秋田県知事選挙開票結果

市	郡	小畑勇二郎 (無所属)	古沢 斐 (無所属)	鈴木 清 (共産党)	有効投票 総数
秋田	市	60,107票	14,426票	7,862票	82,395票
能代	市	20,636票	5,471票	2,135票	28,242票
横手	市	12,378票	1,507票	5,211票	19,096票
大館	市	19,809票	1,743票	1,125票	22,677票
本荘	市	12,714票	2,416票	1,880票	17,010票
男鹿	市	11,209票	3,546票	1,606票	16,361票
湯沢	市	11,638票	2,927票	3,703票	18,268票
大曲	市	11,821票	2,332票	3,233票	17,386票
鹿角	郡	23,302票	4,602票	2,793票	30,697票
北秋田	郡	43,564票	3,940票	2,990票	50,494票
山本	郡	24,010票	4,660票	2,478票	31,148票
南秋田	郡	23,261票	5,403票	2,546票	31,210票
河辺	郡	9,527票	1,862票	822票	12,211票
由利	郡	32,440票	8,061票	5,748票	46,249票
仙北	郡	50,177票	7,395票	10,137票	67,709票
平鹿	郡	27,462票	3,800票	9,767票	41,029票
雄勝	郡	22,190票	3,572票	5,946票	31,708票
県計		416,245票	77,663票	69,982票	563,890票

※秋田県選挙管理委員会編『選挙の記録－昭和21年至昭和33年選挙結果総覧』。

当選した小畑の得票率は結果予想の通り七割台となったが、落選した二人の得票を合わせると全体の四分の一を超えており、はじめから優勢が伝えられた小畑に対する一定の批判が最後まで残っていたことが明らかとなる。八市九

第三回秋田県知事選挙（伊藤寛）

当選 四一六、二四五票 小畑 勇二郎（無所属・新）  
 次点 七七、六六三票 古沢 斐（無所属・新）  
 六六、九八二票 鈴木 清（共産党・新）

郡の開票結果は【表2】の通りであるが、小畑の勝因は保守と共産党を除く革新政党からの支持をいち早く取り付けたことに尽きる。これにより現職の池田知事の再出馬を阻止するとともに、その後小畑に対抗する有力な候補者が現れなかったことから序盤から独走を許す結果となった。そのため前回のように政党の組織力を活かした激しい選挙戦はほとんど行われず、立会演説会を中心とする言論戦がその中心となった。『秋田魁新報』はこの結果を次のように分析している。<sup>(32)</sup>

知事選開票の結果、予想通り小畑氏が古沢、鈴木両氏をはるかに引離し、実質的には独走という格好で圧勝した。保守、革新の四大政党をはじめ各種団体推薦というめぐまれた立場にある小畑氏の当選は、結果的には当然のことと言えるが中盤戦ころまでは氏が余りにも順調に当選を約束つけるような絶対有利な条件を得たこと、保守、革新が一致して氏を推すことが県民に何か割り切れぬ印象を与えたことに合せ池田知事引退に対する同情等が作用して小畑氏優勢の中にも一まつの不安定感があった。

小畑氏独走をさへぎった古沢、鈴木両氏の立候補が一部県民から歓迎の目でみられたのはそのあらわれであり、  
「おそらく古沢、鈴木両氏合せて十万票どまりでないか」という予想よりも大きく両氏が得票したのは小畑氏の順調さに対する一種の反感めいた感情が最後まで一部に消えなかった証左である。

しかし小畑氏が決定的に有利な立場にありながら謙虚さを失わず熱心な選挙運動に終始したこと、立候補者のうちなんといつても小畑氏が最も安定した条件をそなえていること等により終盤戦にはいるや序盤の不評をとりかえし圧倒的な勝利をえた。



【表3】保守と革新の得票数

選挙	保守		革新		その他		合計	
	得票数	議席数	得票数	議席数	得票数	議席数	得票数	議席数
県議会	308,308	30	106,712	8	175,837	12	590,857	50
(%)	52.18	60.00	18.06	16.00	29.76	24.00	100	100

【表4】第3回秋田県議会議員選挙投票結果

市 郡	当日有権者数	投票者数	投票率
秋田市	76,972人	63,517人	82.52%
能代市	27,283人	24,386人	89.38%
横手市	20,122人	17,673人	87.83%
大館市	17,218人	14,173人	82.32%
鹿角郡	41,178人	33,076人	80.32%
北秋田郡	77,743人	65,287人	83.98%
山本郡	49,285人	41,683人	84.58%
南秋田郡	81,536人	64,041人	78.54%
河辺郡	25,782人	23,424人	90.85%
由利郡	79,529人	70,898人	89.15%
仙北郡	107,132人	90,378人	84.36%
平鹿郡	54,026人	46,372人	85.83%
雄勝郡	65,697人	57,340人	87.28%
県計	723,503人	612,248人	84.62%

※秋田県選挙管理委員会編『選挙の記録－昭和21年至昭和33年選挙結果総覧』。

5、県議会議員選挙との関わり

知事選と同日選となった県議会議員選挙は民主党が過半数に達しなかったものの改選前を二議席上回る二三議席を獲得し県議会第一党の座を維持した。【表3】を見ても明らかのように、保守は革新の約三倍の得票を獲得しており、合わせて前回よりも三人多い三〇議席に達した。一方の革新は両派社会党が四人ずつを分け合う形となり、南秋田郡・由利郡・仙北郡では両派による候補者の一本化が達成できなかったことから共倒れとなった。無所属一二人の内訳は保守系が七人、革新系が五人となり、<sup>(53)</sup>保守が全体の七四パーセントを占めた。

今回の知事選は四党が相乗りして小畑を支持したことが県議選と連動した選挙戦を展開しなかったため、知事選と県議選の保守と革新の得票を単純比較して有権者の投票行動を分析することはできないが、保守の大半が小畑を支持したのに対し古沢と鈴木に投票した有権者は特に支持政党を持たない、いわゆる無党派層がその大半を占めていた可能性が高



当選のすぐあとと抱負を語る小畑氏  
〔秋田魁新報〕昭和30年4月25日2面)

い。低調だった知事選に比べ、地域と密接な関係がある県議選に対する有権者の関心は高かった。昭和の大合併最中の県議選であったため、本荘・湯沢・男鹿・大曲の四市は独立選挙区ではなく市制施行前に属していた郡との合区となったが、【表4】の通り全県の投票率は知事選と同じく八四・六二パーセントとなっており、知事選への投票を県議選が牽引した形と言える。

## 6、小畑県政の幕開け

小畑は当選直後、新知事としての抱負を次のように述べている。<sup>(54)</sup>

問 知事は県財政建直しを主眼として選挙を戦って来たが、赤字解消ということは言うは易いけれどもこれを果たすことは中々困難だと思う。自信があるか。

答 困難なことは承知している。これは選挙公報でも述べているが、赤字の原因の中には明らかに国の責任に帰すべきものがある。これをまず明確な資料と正しい理由で追究する。さいわい本県の場合は代議士が一致できるからこの強力な政治力と挙県一致の態勢で推進する。

第3回秋田県議会議員選挙候補者別得票数

第三回秋田県知事選挙（伊藤寛）

郡 市	候 補 者	所属政党	新旧	立候補 届出日	得票数	当 落	選挙運動の費用	
							収入金額	支出金額
秋田市 (82.52%)	◎荻原 麟次郎	無 所 属	新	4月3日	8,813.00	当選①	200,000円	169,636円
	◎金子 恭三	日 本 民 主 党	新	4月3日	7,905.00	当選①	178,132円	178,132円
	◎川口 大助	左 派 社 会 党	現	4月3日	7,486.00	当選②	190,000円	93,358円
	◎鈴木 大寿	無 所 属	現	4月3日	7,386.00	当選③	207,000円	136,487円
	◎小幡谷 政吉	左 派 社 会 党	現	4月3日	6,849.00	当選③	207,000円	176,028円
	◎加賀 泉一郎	日 本 民 主 党	前	4月3日	6,818.00	落選	240,800円	187,379円
	◎宮 庄太郎	自 由 党	現	4月3日	5,870.00	落選	210,000円	198,716円
	◎小統 資平	無 所 属	新	4月3日	3,076.00	落選	101,749円	101,749円
	◎山田 善之助	日 本 民 主 党	現	4月3日	2,931.00	落選	150,000円	66,120円
	◎仙葉 逸郎	日 本 民 主 党	新	4月3日	2,318.00	落選	103,995円	103,995円
	◎堀井 逸郎	無 所 属	新	4月3日	1,126.00	落選	54,671円	54,671円
	能代市 (89.38%)	◎西村 節朗	日 本 民 主 党	新	4月3日	10,688.00	当選①	200,000円
◎腰 太郎		右 派 社 会 党	現	4月3日	7,378.00	当選③	181,270円	181,270円
◎大塚 政市		無 所 属	現	4月3日	5,884.00	落選	177,163円	177,163円
横手市 (87.83%)	◎春 茂	右 派 社 会 党	前	4月3日	9,893.00	当選②	133,350円	132,935円
	◎武 礼治	無 所 属	現	4月3日	7,419.00	落選	170,000円	160,475円
大館市 (82.32%)	◎中 直敏	日 本 民 主 党	現	4月3日	9,893.00	当選②	135,000円	130,795円
	◎池田 和明	無 所 属	新	4月3日	3,581.00	落選	217,090円	217,090円
鹿角郡 (80.32%)	◎木村 定松	右 派 社 会 党	現	4月3日	6,248.35	当選②	114,906円	114,906円
	◎木村 米治	無 所 属	新	4月3日	5,736.69	当選①	95,000円	77,884円
	◎青山 山俊	日 本 民 主 党	現	4月3日	5,634.00	当選③	102,151円	102,151円
	◎青 恒太郎	無 所 属	新	4月3日	3,968.00	落選	138,076円	138,076円
	◎米 恒	無 所 属	新	4月3日	3,894.00	落選	189,622円	189,622円
	◎金 憲	無 所 属	新	4月3日	3,879.00	落選	155,920円	155,920円
	◎関 里威	日 本 民 主 党	元	4月3日	2,828.00	落選	110,310円	110,310円
	◎佐々木 良一	無 所 属	新	4月3日	114.00	落選	50,000円	46,320円
北秋田郡 (83.98%)	◎畠 沢 恭一	右 派 社 会 党	現	4月3日	8,297.00	当選③	200,000円	118,885円
	◎成田 重右衛門	自 由 党	現	4月3日	6,200.00	当選③	129,455円	129,455円
	◎成井 敬治	無 所 属	新	4月3日	6,019.00	当選①	271,400円	182,399円
	◎筒井 敬治	日 本 民 主 党	現	4月3日	5,832.00	当選③	128,307円	128,307円
	◎斎藤 静蔵	無 所 属	新	4月3日	5,415.00	当選①	270,000円	69,282円
	◎近 藤 威仙	日 本 民 主 党	新	4月3日	5,188.00	落選	223,395円	191,521円
	◎奥田 信吾	右 派 社 会 党	新	4月3日	5,155.00	落選	130,000円	104,830円
	◎福岡 与左衛門	無 所 属	新	4月3日	4,616.00	落選	100,000円	94,195円
	◎金 逸郎	日 本 民 主 党	新	4月3日	4,373.00	落選	161,091円	161,091円
	◎本 田 其治	日 本 民 主 党	新	4月4日	3,551.00	落選	152,220円	152,220円
	◎佐藤 忠俊	無 所 属	新	4月4日	2,052.00	落選	207,620円	207,620円
	◎野呂 満美	無 所 属	新	4月3日	1,942.00	落選	200,000円	171,906円
	◎小武 海順	無 所 属	新	4月3日	1,919.00	落選	200,000円	174,165円
	◎中山 良四郎	無 所 属	新	4月3日	1,398.00	落選	270,000円	107,570円
山本郡 (84.58%)	◎山崎 良造	自 由 党	新	4月3日	6,358.00	当選①	143,638円	143,638円
	◎山本 友司	日 本 民 主 党	現	4月3日	5,297.00	当選③	200,810円	200,810円
	◎工藤 庄吉	日 本 民 主 党	現	4月3日	4,676.00	当選②	160,000円	158,355円
	◎吉 良	無 所 属	新	4月3日	4,297.00	落選	200,500円	170,040円
	◎吉野 吕惇一郎	無 所 属	新	4月3日	4,076.00	落選	165,063円	165,063円
	◎近藤 藤一郎	無 所 属	新	4月3日	3,760.00	落選	200,000円	130,790円
	◎柴 重一	無 所 属	新	4月3日	3,585.00	落選	290,000円	187,819円
	◎島田 清四郎	右 派 社 会 党	新	4月3日	3,406.00	落選	150,000円	101,580円
	◎大倉 勘治郎	日 本 民 主 党	現	4月3日	2,280.00	落選	170,000円	137,480円
	◎藤 啓一郎	無 所 属	新	4月3日	2,142.00	落選	200,500円	149,618円
南秋田郡 (78.54%)	◎栗山 蔵之助	日 本 民 主 党	現	4月3日	9,129.00	当選②	200,000円	118,095円
	◎渋谷 倉蔵	自 由 党	現	4月3日	8,626.00	当選③	180,000円	147,385円
	◎斎藤 正作	無 所 属	新	4月3日	8,605.00	当選①	168,000円	124,488円

	◎渡部重秋	日本民主党	新	4月3日	8,584.00	当選①	204,395円	204,395円
	◎高橋清一	無所属	新	4月3日	8,310.00	当選①	279,886円	216,064円
	◎安田惣一郎	日本民主党	現	4月3日	8,113.00	当選③	297,610円	136,075円
	関山繁之助	日本民主党	元	4月3日	7,904.00	落選	125,000円	89,723円
	金子鉄藏	右派社会党	新	4月3日	2,024.00	落選	100,000円	70,850円
河辺郡 (90.85%)	◎岡部精隆	無所属	新	4月3日	5,647.00	当選①	115,968円	115,968円
	◎伊藤隆徳	日本民主党	新	4月3日	4,768.00	当選①	110,544円	110,544円
	鎌田治司	自由民主党	現	4月3日	4,673.00	落選	135,012円	135,012円
	加藤長吉	日本民主党	現	4月3日	4,192.00	落選	102,075円	102,075円
	佐藤一清	無所属	新	4月3日	2,138.00	落選	108,200円	108,200円
	大島清藏	無所属	新	4月3日	1,486.00	落選	104,972円	104,972円
由利郡 (89.15%)	◎佐藤久一	日本民主党	新	4月3日	7,599.62	当選①	232,600円	178,059円
	◎佐藤李之助	日本民主党	前	4月3日	6,397.48	当選④	180,000円	127,187円
	◎長谷部七郎	無所属	新	4月3日	5,503.00	当選①	310,000円	198,781円
	◎三浦太郎	無所属	新	4月3日	5,020.00	当選①	192,952円	192,952円
	◎伊藤為之助	日本民主党	現	4月3日	4,951.00	当選③	180,000円	179,076円
	◎猪股勘一	自由民主党	現	4月3日	4,740.98	当選③	204,515円	193,665円
	岡村岡兼吉	自由民主党	現	4月3日	4,733.00	落選	162,305円	162,305円
	阿部直一郎	無所属	新	4月3日	4,711.00	落選	176,000円	136,190円
	猪股直三	無所属	新	4月3日	4,163.00	落選	160,000円	159,186円
	鈴木木田	無所属	新	4月3日	4,158.88	落選	192,365円	185,633円
	須田英二	無所属	新	4月3日	3,562.00	落選	200,000円	198,690円
	佐藤大八	日本民主党	新	4月3日	3,444.00	落選	250,000円	179,599円
	佐々木甚右衛門	日本民主党	新	4月3日	3,006.75	落選	137,205円	137,205円
	佐藤与太郎	無所属	新	4月3日	2,826.00	落選	201,062円	201,062円
	村上正男	左派社会党	新	4月3日	2,110.67	落選	112,930円	112,930円
				4月3日	1,634.00	落選	108,000円	104,480円
仙北郡 (84.36%)	◎小松武文	日本民主党	現	4月3日	8,958.00	当選②	114,740円	108,450円
	◎原龍四郎	無所属	現	4月3日	8,461.00	当選①	129,075円	128,838円
	◎小山田四郎	無所属	現	4月3日	8,032.00	当選②	220,000円	201,080円
	◎鬼田忠工	日本民主党	現	4月3日	6,590.00	当選①	200,000円	193,102円
	◎大野川右衛門	日本民主党	現	4月3日	6,466.00	当選②	170,904円	170,904円
	◎沢口フク	自由民主党	現	4月3日	6,317.00	当選③	180,237円	180,237円
	◎吉田沢耕一郎	左派社会党	現	4月3日	6,266.00	当選①	290,000円	212,281円
	阿部正次	日本民主党	現	4月3日	6,251.00	落選	250,000円	90,195円
	梁部正一郎	無所属	新	4月3日	5,791.00	落選	158,546円	158,546円
	龍輪二太郎	日本民主党	新	4月3日	4,974.00	落選	157,000円	156,445円
	佐藤文之助	左派社会党	前	4月3日	4,754.00	落選	185,000円	161,043円
	佐藤隆喜	右派社会党	新	4月3日	3,707.40	落選	157,170円	152,506円
	深浦宗寿	無所属	新	4月3日	3,082.54	落選	143,413円	143,413円
	藤原熊藏	日本民主党	新	4月3日	2,617.00	落選	170,000円	160,598円
	今原直	自由民主党	現	4月3日	2,299.00	落選	200,000円	120,580円
		日本共産党	新	4月3日	1,877.00	落選	63,900円	63,700円
平鹿郡 (85.83%)	◎谷藤征得	日本民主党	現	4月3日	10,040.00	当選③	128,000円	122,670円
	◎鈴木順久	日本民主党	現	4月3日	9,868.00	当選②	200,000円	175,173円
	◎柴田辰一郎	右派社会党	現	4月3日	8,974.25	当選②	109,500円	103,258円
	◎柴田忠一郎	自由民主党	現	4月3日	7,934.66	当選②	160,000円	159,428円
			日本民主党	現	4月3日	7,526.00	落選	110,250円
雄勝郡 (87.28%)	◎深瀬久四郎	日本民主党	前	4月3日	9,437.00	当選②	163,477円	163,477円
	◎佐藤育秀	自由民主党	現	4月3日	7,805.28	当選②	200,000円	199,797円
	◎藤善治郎	日本民主党	現	4月3日	7,195.86	当選③	223,750円	156,355円
	◎阿部英一	日本民主党	現	4月3日	6,715.00	当選③	94,450円	85,570円
	◎佐藤茂吉	自由民主党	現	4月3日	5,222.93	当選②	200,000円	188,923円
	金沢一	無所属	新	4月7日	5,021.00	落選	180,542円	178,522円
	佐藤英夫	日本民主党	現	4月3日	4,937.52	落選	150,000円	146,663円
	高橋ミサオ	無所属	新	4月3日	2,443.86	落選	121,425円	121,425円
	高橋源治	左派社会党	新	4月3日	2,405.95	落選	144,000円	142,400円
	金子優一	右派社会党	新	4月3日	2,401.00	落選	119,273円	119,273円
	佐々木忠次郎	無所属	新	4月4日	112.00	落選	-	-

※選挙運動の費用は秋選管告示第43号（『秋田県公報』号外（一）、昭和30年6月6日）による。

第3回秋田県知事選挙・秋田県議会議員選挙得票率

第三回秋田県知事選挙（伊藤寛）

選挙区	秋田県知事選挙（4月23日）				秋田県議会議員選挙（4月23日）						
	小畑勇二郎 （無所属）	古沢 斐 （無所属）	鈴木 清 （日本共産党）	有効投票数	日本民主党	自由 党	右派社会党	左派社会党	日本共産党	無 所 属	有効投票数
秋 田 市	60,107票 72.95	14,426票 17.51	7,862票 9.54	82,395票 100	28,401票 33.77	10,243票 12.18	3,790票 4.51	16,373票 19.47	0票 0	25,290票 30.07	84,097票 100
能 代 市	20,636票 73.07	5,471票 19.37	2,135票 7.56	28,242票 100	13,149票 44.32	399票 1.34	7,620票 25.69	0票 0	0票 0	8,498票 28.65	29,666票 100
横 手 市	12,378票 64.82	1,507票 7.89	5,211票 27.29	19,096票 100	1,667票 7.24	469票 2.04	10,901票 47.32	2,391票 10.38	15票 0.07	7,595票 32.97	23,038票 100
大 館 市	19,809票 87.35	1,743票 7.68	1,125票 4.96	22,677票 100	14,763票 63.24	742票 3.18	0票 0	1,541票 6.60	0票 0	6,297票 26.98	23,343票 100
本 荘 市	12,714票 74.74	2,416票 14.20	1,880票 11.05	17,010票 100	8,451票 47.25	3,770票 21.08	2,182票 12.20	137票 0.77	0票 0	3,345票 18.70	17,885票 100
男 鹿 市	11,209票 68.51	3,546票 21.67	1,606票 9.82	16,361票 100	10,033票 57.61	1,834票 10.53	4,908票 28.18	0票 0	0票 0	641票 3.68	17,416票 100
湯 沢 市	11,638票 63.71	2,927票 16.02	3,703票 20.27	18,268票 100	11,630票 60.21	3,173票 16.43	583票 3.02	2,507票 12.98	0票 0	1,423票 7.37	19,316票 100
大 曲 市	11,821票 67.99	2,332票 13.41	3,233票 18.60	17,386票 100	4,971票 27.81	1,540票 8.62	727票 4.07	2,112票 11.82	224票 1.25	8,300票 46.44	17,874票 100
鹿 角 郡	23,302票 75.91	4,602票 14.99	2,793票 9.10	30,697票 100	9,513票 29.45	0票 0	6,248票 19.34	0票 0	0票 0	16,539票 51.20	32,300票 100
北秋田郡	43,564票 86.28	3,940票 7.80	2,990票 5.92	50,494票 100	14,074票 26.81	5,858票 11.16	0票 0	11,911票 22.69	0票 0	20,645票 39.33	52,488票 100
山 本 郡	24,010票 77.08	4,660票 14.96	2,478票 4.91	31,148票 100	9,792票 28.66	5,969票 17.47	3,164票 9.26	0票 0	0票 0	15,246票 44.62	34,171票 100
南秋田郡	23,261票 74.53	5,403票 17.31	2,546票 8.16	31,210票 100	10,785票 32.62	5,087票 15.39	3,089票 9.34	0票 0	0票 0	14,102票 42.65	33,063票 100
河 辺 郡	9,527票 78.02	1,862票 15.25	822票 6.73	12,211票 100	6,004票 47.36	1,537票 12.12	374票 2.95	0票 0	0票 0	4,763票 37.57	12,678票 100
由 利 郡	32,440票 70.14	8,061票 17.43	5,748票 12.43	46,249票 100	20,385票 41.75	5,523票 11.31	1,857票 3.80	1,460票 2.99	0票 0	19,601票 40.14	48,826票 100
仙 北 郡	50,177票 74.11	7,395票 10.92	10,137票 14.97	67,709票 100	31,729票 46.51	7,889票 11.56	3,044票 4.46	6,517票 9.55	1,638票 2.40	17,398票 25.50	68,215票 100
平 鹿 郡	27,462票 66.93	3,800票 9.26	9,767票 23.81	41,029票 100	26,441票 61.49	8,017票 18.64	8,090票 18.81	102票 0.24	0票 0	350票 0.81	43,000票 100
雄 勝 郡	22,190票 69.98	3,572票 11.27	5,946票 18.75	31,708票 100	15,366票 45.89	9,104票 27.19	1,612票 4.81	1,595票 4.76	0票 0	5,804票 17.34	33,481票 100
県 計	416,245票 73.82	77,663票 13.77	69,982票 12.41	563,890票 100	237,154票 40.14	71,154票 12.04	58,189票 9.85	46,646票 7.89	1,877票 0.32	175,837票 29.76	590,857票 100
※下段は得票率（%）を示す				当選議員数	23 46.00	7 14.00	4 8.00	4 8.00	0 0	12 24.00	50 100

問 行政費の節約を唱えたがどの方向をどういう風に節約するか。

答 私は節約ということを「百円のもの八十円に削る」ことだと考えていない。大乗的な真の節約とは「百円のもの二百円にも三百円にも使う」事だと考えている。節約は金額の問題も大事だけれども要は行政態度だと思う。私はツノをためて牛を殺すようなことはしたくない。つまり金額的な節約にこだわる余り県庁の生命力である指導力を失うようなことはしない。それから仕事をしたようにみせかけるため雀の涙ほどの予算を配分するようなことをせず、予算のつかい方を重点的に最も必要なことに集中する。すべての施策は時間ということが大事であつて適切な時にこれを行えば即能率的な行政となり金が二倍にも三倍にも生きることになる。用もないのに超過勤務するというようなことも厳に戒め宴会政治もやめねばならぬ。

問 「県民所得を増加して県税増収をはかる」というが具体的にどんなことをするのか。

答 総合開発も必要だが原始産業、植民地経済を解消するため県内の生産品を県内で加工することに基本を置きたい。例えば銅の問題や農機具の問題があり、土地改良に使うヒューム管などは九〇%まで他県から移入している現実だ。また「県産品愛用運動」を起し県民の所得を増加しつつその過程で税増収をはかりたい。一例を挙げれば県内には五大鉱山、三大工場があるが、ここで使う必需品生産資材は大部分県外から移入されている。

問 行政機構の刷新についてどう考えるか。

答 結果として行政整理になるかも知れないが、能率向上の見地から検討し配置転換する。

余剰人員が出たとすれば社会保障の見地から個々の犠牲を極力避けたい。現在名目的にある機構改革審議会を実質的に活動させ出来る限りすみやかに実施する。この際特に民主党にお願いするが、地方の行政機構改革に中央が邪魔しないでほしい。人事異動は政党のヒモ付き人事や選挙の派閥人事は絶対排除する。

問 産業経済でもっとも大事な農政の基本方針は何か。

答 従来の補助政策で補助対象になり得る農家は中以上のものばかりであったからそういう意味で相当改善の必要がある。しかし貧弱な財政のもとでは困難だから農協を中心とする農業団体の育成強化が先決問題だと考えている。

小畑は財政立て直し策として、まず池田県政下で発生した赤字の原因を徹底的に追究し、行政コストの削減を適所に実施することと県産品愛用運動を起こして県民の所得と県税の増収を図ることを掲げている。また行政機構の改革上最も重要な人事については能率向上の見地から有能な人材を公正に配置する意向を示した。三十日に初登庁した小畑は午前一〇時から知事室で池田前知事とわずか五分間の事務引継を行い、<sup>(55)</sup>一時からは県庁中庭に塩谷末吉副知事以下本庁職員を集め約一〇分間にわたって就任のあいさつと説示を述べた。説示の内容はまず小畑の二〇余年に及ぶ役人生活の経験から公務員として取るべき態度を注意し、続いて①小畑県政は経営者精神に則って能率主義を貫く、②県政の重点は財政の健全化と機構改革にある、③機構改革は拙速主義で行くなど小畑県政発足に当たったの基本方針を明らかにした。最後に「役付きの職員で共に仕事をしがたい実情にある人は遠慮なく申出てもらいたい」と部内結束の方針を示した。<sup>(56)</sup>

改選後初の県議会（臨時会）は五月十四日に招集されたが、議長・副議長および議会人事案をめぐって大紛糾し、当初は十七日までの四日間であった会期が三回にわたり合計四日間延長し二十一日までの八日間となった。<sup>(57)</sup> 招集日までに結成された会派は次の通りである。<sup>(58)</sup>

①日本民主党（二五人）

金子恭三、西村節朗、中田直敏、青山倭、斎藤卯一、山本友司、工藤庄吉、栗山藏之助、渡部重秋、安田惣太郎、

伊藤隆治、佐藤久一、佐藤奎之助、伊藤為之助、猪股勘一郎、鬼川誠、小松武文、大野忠右エ門、鈴木順治、谷藤征得、深瀬久四郎、阿部英一、佐藤善治郎、近藤静蔵、岡部精一

② 日本社会党（九人）

川口大助、小幡谷政吉、宮腰庄太郎、春日清、木村定治、畠沢恭一、吉沢耕悦、柴田久郎、木村米松

③ 自由党（六人）

成田重右衛門、山崎良造、渋谷倉蔵、沢口フク、柴田忠一郎、佐藤育秀

④ 明正クラブ（六人、五月二十日に革新クラブに改称）

鈴木寿、筒井敬治、斎藤正作、高橋清一、長谷部七郎、佐藤茂吉

⑤ 農政クラブ（四人）

萩原麟次郎、三浦太郎吉、小山田四郎、原龍一

最年長の沢口フクを臨時議長として臨時会は開会したものの、第一党となった民主党が各派に人事案を提示しないまま正・副議長と常任委員長ポストを独占しようとした動きに社会党・自由党・明正クラブ・農政クラブが真っ向から反発したため妥協点を見いだせないままただ時間だけが過ぎて行った。このため民主党以外の四党派は正・副議長問題を話し合ったが、自由党と農政クラブは民主党に消極的同調、すなわち議長は民主党から出しても良いとしたのに対し、社会党と明正クラブはあくまで正・副議長の民主党独占を阻止しようと躍起になり、四党の足並みは揃わなかった。この状況を尻目に民主党は五日目の十八日午後一一時過ぎに正・副議長選出での他会派との対決を決意し、翌十九日の開会時間を午前〇時に繰り上げて会議を開くことを決定した。こうして午前〇時二九分に始まった正・副議長選挙で、第三六代議長に谷藤征得、第四〇代副議長に青山倭を選出した。<sup>59</sup>



議長選挙（投票総数四八、有効三五、白票一三）

◎谷藤 征得（民主党） 三四票

安田 惣太郎（民主党） 一票

副議長選挙（投票総数四八、有効二五、白票二二、無効一）

◎青山 倭（民主党） 二五票

正・副議長の選出後、谷藤議長から小畑知事が紹介され、次のようにあいさつを述べた。<sup>(60)</sup>

昭和三十年度最初の県議会に当りまして一言御挨拶を申し上げます。各位におかれましては去る四月の選挙におきまして県民の絶大なる信頼と期待をになわれそれぞれ御当選の榮譽を得られた次第でありまして、県政の前途をきわめて多事多難の際、地方自治確立に対し格別な熱意と抱負を持たれる各位をお迎えすることのできましたことは、県の執行部といたしましてもまことに力強く存じておるのでありまして、つつしんでこの壇上からお祝いを申し上げると同時に、県政伸展のため今後格段の御尽力あらんことを御期待申し上げます。また不肖私も各位の御援助と県民多数の御支持によりまして三代目の民選知事の職を汚すことになつたのでありますが、まことに身に余る光榮と存ずるとともに、その責任の重大なることを痛感いたしておるところであります。県政伸展の基礎確立のために解決を要する当面の諸問題が山積しておりますのに対しましては、はなはだ浅学菲才なものでありまして、今後県政の各方面にわたりまして各位の御指導と御援助をお願いする部面が多々あるのであります。私はあくまでも忠実なる公僕として本会議の公正なる御批判と御鞭撻の下に、常に県民の輿論を県政の上に反映して参りますよう誠心誠意努力いたしたい覚悟でございます。何卒よろしく御指導、御援助を賜りますよう衷心よりお願い申し上げます。はなはだ簡単でございますが一言申し上げ御挨拶と

する次第であります。

深夜一時前に新知事があいさつをするという異例の小畑県政の幕開けとなったが、一期目の最大の課題は赤字財政からの脱却であった。六月定例県議会に提出した財政再建計画は一二億六〇〇〇万円（赤字総額一六億円のうち、三億円の直轄工事負担金未納分があるが、この分は長期償還に切り替えられるので除外する）に上る赤字を再建法の適用を受けて、翌三十一年度から十年間で解消するというものであった。国からの再建債によって赤字の穴埋めを行うとともにコスト削減と県税の引上げ等によって歳入を増やし、再建債を返済しながら過去の赤字を解消することになった。結局のところ、二度の大型景気に支えられた影響もあり、小畑県政二期目の半ばに予定よりも二年早く昭和三十八年度で赤字財政から解放され、この年の実質収支は三億九七〇〇万円の黒字決算となった。<sup>(61)</sup>さらに戦後の食糧危機に対応するべく八郎潟干拓の実現に向けて並々ならぬ意欲を示し、昭和三十二年末には漁民側との漁業補償を総額一六億九一〇〇万円で解決して、翌昭和三十三年八月二十日に秋田市の山王体育館で起式が行われた。<sup>(62)</sup>干拓地が単体自治体「大潟村」として六世帯一四人で発足するのはこれから六年後の昭和三十九年十月一日のことである。また昭和の大合併の総仕上げを断行し、四市五一町一六九村から新市町村建設促進法（昭和三十一年六月三十日法律第百六十四号）<sup>(63)</sup>が失効する昭和三十六年までに八市三九町二五村に再編した。<sup>(64)</sup>このように小畑県政一期目は池田県政から引き継いだ負の遺産の処理からスタートしたため、一期目の任期中に成果を上げた政策はそう多くはなかった。

## おわりに

第三回秋田県知事選挙は保守と共産党を除く革新政党から推薦された小畑が序盤戦から他の二人の候補を大きく

リードし、およそ七四パーセントの得票率で四年前の雪辱を晴らした。小畑の勝因は何と言っても政党対応が早かったことである。民主党へは一月中旬に出馬の意思を伝え、総選挙後に前回と同じく国会議員が中心となって候補者の選定を行い、二週間余の協議を経て小畑への一本化が実現した。再選出馬に前向きだった現職の池田知事は小畑の行動をはじめは楽観視していたが、次第に追い込まれ形勢打開を図るために民主党へ入党を申し込んだ。ところがこの行動に反発した与党自由党からは早々と池田不支持の態度が示され、出馬に向けた環境は一気に厳しくなった。小畑は四党からの支持を得ていち早く立候補表明を行ったのに対し、池田は告示日ぎりぎりまで熟慮を重ねたものの最終的に出馬断念に追い込まれた。再出馬を見据えて四年間、秋田市助役の立場で各地に根回しを行ってきた小畑の再チャレンジの動きに池田が巻き込まれた形となった。選挙戦は県内三三カ所で行われた立会演説会を中心とした言論戦が中心で序盤戦から小畑優勢が伝えられていたことと同日選となった県議選と連動した戦いがほとんど展開されなかったため知事選への関心はとにかく低かった。そのため実質的な選挙戦は池田が不出馬を表明した三月二十九日までほぼ終了したと言うことが可能である。

小畑は六期二十四年間秋田県政を担うことになるが、政策的に最もその辣腕を發揮したのは二期目の任期中である。八郎湯干拓事業以外の大きな事業としては県民に夢と希望を与えた第一六回国民体育大会の誘致（昭和三十四年十月二十二日）を挙げることができる。県財政窮乏の中で本来であれば到底開催が不可能であった国民的一大行事を秋田に誘致することができた小畑の政治的手腕は評価に値する。通称「秋田まごころ国体」<sup>64</sup>は県外からの選手・役員七〇〇名に対する宿泊施設が確保できず県内の一般家庭に宿泊してもらおう民泊制度を導入した。こうした小畑の発想力を活かした数々の政策は県民に広く受け入れられて行くことになる。いわゆる県民党を標榜して事実上の信任投票となった第四回（昭和三十四年四月二十三日）以降の選挙戦の動向については稿をあらためて考察したいと思う。

註

- (1) 拙稿「第二回秋田県知事選挙」(皇學館大學人文學會編『皇學館論叢』第四九卷第三号、平成二十八年六月、二六〇六一頁)。
- (2) 『秋田魁新報』昭和三十年一月一日五面。
- (3) 『秋田魁新報』昭和三十年一月一日五面。
- (4) 『秋田魁新報』昭和三十年一月十七日一面。
- (5) 『読売新聞秋田地方版』昭和三十年一月二十日八面。
- (6) 『秋田魁新報』昭和三十年一月二十三日二面。
- (7) 『秋田魁新報』昭和三十年一月二十五日一面。
- (8) 『秋田魁新報夕刊』昭和三十年一月二十五日一面。
- (9) 第二十七回衆議院議員総選挙秋田県選挙区(昭和三十年二月二十七日、投票率八二・一二パーセント)の開票結果は次の通りである。

【第一区(定員四人)】投票率八〇・四五パーセント

- |    |         |                |        |
|----|---------|----------------|--------|
| 当選 | 六二、〇五八票 | 石田博英(日本民主党・前)  | 当選回数五回 |
| 当選 | 五五、〇八五票 | 須磨弥吉郎(日本民主党・前) | 当選回数二回 |
| 当選 | 五三、〇三一票 | 石山権作(左派社会党・前)  | 当選回数二回 |
| 当選 | 四九、六八八票 | 細野三千雄(右派社会党・前) | 当選回数五回 |
| 次点 | 四三、七五三票 | 柳谷清三郎(日本民主党・新) |        |
|    | 三六、六八二票 | 平沢長吉(自由党・元)    |        |
|    | 一〇、四〇四票 | 宮腰喜助(無所属・元)    |        |
|    | 五、一八六票  | 三浦雷太郎(日本共産党・新) |        |

【第二区(定員四人) 投票率八四・一七パーセント】

当選 五五、八九七票 笹山茂太郎(日本民主党・元) 当選回数三回  
 当選 四八、二五〇票 根本龍太郎(日本民主党・前) 当選回数五回  
 当選 四六、一二六票 川俣清音(右派社会党・前) 当選回数六回  
 当選 三六、七九七票 斎藤憲三(日本民主党・前) 当選回数三回  
 次点 三四、〇一一票 飯塚定輔(自由党・前)

二七、九九六票 栗林三郎(左派社会党・新)

七、九三五票 鈴木清(日本共産党・新)

五、八九一票 遠藤久雄(自由党・新)

五、六一五票 武野武治(無所属・新)

(10) 『秋田魁新報』昭和三十年三月一日一面。柴田は第四回参議院議員通常選挙全国区(昭和三十一年七月八日)から自由民主党公認で出馬し初当選(八位)した。

(11) 『秋田魁新報』昭和三十年三月四日一面。

(12) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年三月五日八面。

(13) 『秋田魁新報』昭和三十年三月八日一面。

(14) 『秋田魁新報』昭和三十年三月六日一面。

(15) 『秋田魁新報』昭和三十年三月八日一面。

(16) 『秋田魁新報』昭和三十年三月九日一面。

(17) 『秋田魁新報』昭和三十年三月九日一面。

(18) 『秋田魁新報』昭和三十年三月十一日一面。

第三回秋田県知事選挙(伊藤寛)

- (19) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十五日一面。
- (20) 『毎日新聞秋田地方版』 昭和三十年三月十五日八面。
- (21) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十六日一面。
- (22) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十六日一面。ただ革新派の中には小畑と民主党との間で三つの了解が成立したことに對して反発する動きもあつたが、この共同声明は三月上旬にすでに制約済みであつた（鈴木一著『知事選奮闘記』、日本制作社刊、昭和五十一年五月、九〜一四頁）。
- (23) 『秋田魁新報夕刊』 昭和三十年三月十六日一面。
- (24) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十七日一面。
- (25) 財団法人小畑勇二郎顕彰会編『小畑勇二郎の生涯』、昭和六十年十月、一五五頁。
- (26) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十七日一面。
- (27) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十八日一面。
- (28) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月二十八日一面。
- (29) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月二十八日一面。
- (30) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月三十日一面。
- (31) 『秋田魁新報』 昭和三十年四月四日一面「本県週刊の焦点」。
- (32) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月十七日一面。
- (33) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月二十六日一面。
- (34) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月二十八日一面。
- (35) 『毎日新聞秋田地方版』 昭和三十年三月三十日八面。
- (36) 『秋田魁新報』 昭和三十年三月二十八日一面。

- (37) 『秋田魁新報夕刊』昭和三十年三月二十八日一面。
- (38) 『秋田魁新報夕刊』昭和三十年三月二十九日一面。
- (39) 『秋田魁新報夕刊』昭和三十年三月二十九日一面および『秋田魁新報』昭和三十年三月三十日一面。
- (40) 『秋田魁新報』昭和三十年四月六日二面「知事候補の主張①」（古沢・小畑）、『秋田魁新報』昭和三十年四月七日二面「知事候補の主張②」（鈴木）。
- (41) 『朝日新聞秋田地方版』昭和三十年四月九日八面。
- (42) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年四月七日八面。
- (43) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年四月五日八面。小畑は秋田市をトップに由利郡に向かい、南秋田郡・能代市・北秋田郡を北上して三日と四日は河辺郡・仙北郡、五日は横手市・平鹿郡・雄勝郡を順次周り、六日の立会演説会開始前に全県下の遊説を終了した。組織を持たず苦しい選挙戦となった古沢と日本農民組合の会議で上京中の鈴木は四日から街頭演説を開始した。
- (44) 『読売新聞秋田地方版』昭和三十年四月十二日八面。
- (45) 『秋田魁新報』昭和三十年四月十一日一面。
- (46) 『読売新聞秋田地方版』昭和三十年四月十二日八面。
- (47) 『朝日新聞秋田地方版』昭和三十年四月十三日八面「地方選挙よもやま 記者座談会①」。
- (48) 『秋田魁新報』昭和三十年四月二十一日一面。
- (49) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年四月二十五日八面。
- (50) 『朝日新聞秋田地方版』昭和三十年四月二十五日八面。
- (51) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年四月二十五日八面。大館市では無効票が一九二九票に達し、うち白票が二二九票、市長・市議候補者名や「滅死亡国」「池田徳治君」「選ぶものなし」などと書かれた投票が目立ち、小畑の出身地域においても一定

の批判があつたことが明らかとなる。

- (52) 『秋田魁新報夕刊』昭和三十年四月二十四日一面。
- (53) 『秋田魁新報』昭和三十年四月二十五日一面。
- (54) 『秋田魁新報』昭和三十年四月二十五日二面。
- (55) 『読売新聞秋田地方版』昭和三十年五月一日八面。
- (56) 『毎日新聞秋田地方版』昭和三十年五月一日八面。
- (57) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、三三五頁。
- (58) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、一二九八～一三〇〇頁。
- (59) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、三三五～三三九頁。
- (60) 秋田県議会議事事務局編『昭和三十年五月秋田県議会議臨時会會議録』第六号、昭和三十年五月十九日。
- (61) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、四六～六〇頁。
- (62) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、一八六～一九六頁。
- (63) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、一九六～一九九頁。
- (64) 秋田県議会議事事務局編『秋田県議会史』第二卷、昭和五十九年三月、二二七～三三五頁。

(いとう) ひろのり・秋田工業高等専門学校非常勤講師